

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 14日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21531020

研究課題名（和文） 発達障害のある大学生の支援ニーズ把握質問紙の開発

研究課題名（英文） Development of support needs questionnaires for students with developmental disabilities.

研究代表者

山口 恒夫（YAMAGUCHI TSUNEO）

信州大学・教育学部・名誉教授

研究者番号：60115384

研究成果の概要（和文）：自閉症スペクトラム障害（以下 ASD）と注意欠陥多動性障害（以下 ADHD）の傾向に関わる困り感と支援ニーズを把握するための質問紙を実施し、その特徴及び信頼性、妥当性を検討した。ASD 困り感質問紙 ADHD 困り感質問紙は、既存の自己評価質問紙の項目に加え、事例報告論文、当事者の手記等から行動特徴、困難経験を表す記述を抜き出したものを項目化し、それらの困り感を4段階評定で問う質問紙であった。分析の結果、十分な信頼性が示され、外的変数との関連から妥当性に関する証拠も得られた。

研究成果の概要（英文）：A new self-rating questionnaire was developed to identify the support needs of students with attention-related difficulties and those with autism spectrum disorders. Reliability and validity of the questionnaires were examined in this study. Semi-structured interview with students revealed the nature of the difficulties they experience and support needs of students with attention problems and social problems. These questionnaire will be useful tools for early intervention.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：教育哲学

科研費の分科・細目：教育学、特別支援教育

キーワード：発達障害、ニーズ調査、大学生、学生支援

1. 研究開始当初の背景

少子化、入試の多様化を背景に発達障害（もしくはその傾向）のある大学生が増加してきており、事例報告も見られるようになった（西村，2006 など）。発達障害は「見えにくい障害」であり、周囲の理解のなさは二次的な心理的問題にもつながる。学生が大きな困難に直面することを予防するためにも、早期に問題を把握し、支援につなげることが重要である。

発達障害のスクリーニングに関しては、中等教育以前の段階を想定した他者評価によるチェックリストが開発されている（例えば上野他による LDI）。しかし、高等教育機関では高校までのように学級担任がいるわけではなく、他者評価によって多くの学生を評価することは難しい。

青年期以降を対象としたものでは、症状や行動特徴に関する自己評価型質問紙が国内外で開発されている（例えば若林他，2004）。

申請者らも ADHD 傾向を評価するための質問紙を開発した(高橋・中村他, 2003)。しかし、これらを用いても客観的に自己評価できるとは限らない。また、申請者らが試行的に ADHD 傾向の強い学生を対象に面接を行ったところ、必ずしも支援ニーズがあるとは限らなかった。以上のことから、発達障害のある大学生の潜在的支援ニーズを把握するためには、「症状」ではなく「困り感」を自己評価する質問紙の方が適していると考えた。

「困り感」から支援ニーズを把握するためのチェックリストについては特別支援教育総合研究所が開発を試みているが、まだ十分な検証が行われていない(特殊教育総合研究所, 2007)。さらに、このチェックリストは ADHD 関連の項目に比べ、PDD 関連の項目が少ない。

本研究では申請者らの作成した ADHD 傾向質問紙をさらに発展させるために、他の既存の質問紙、当事者の手記や事例報告などから幅広く項目を集める。それを整理した上で項目を「困っているかどうか」という形式に書き換えることによって、PDD や ADHD のある学生が体験する「困り感」を網羅するような質問紙を作成する。

2. 研究の目的

- (1)「困り感」を網羅する項目リストの作成：発達障害のある青年が直面しうる困難にはどのようなものがあるかを、既存の質問紙、事例報告、当事者の手記から明らかにする。
- (2)外的変数との関連の検討：困難の内容を質問項目とした質問紙を作成し、発達障害的行動傾向や認知特性と関係が見られるかどうか明らかにする。
- (3)実際の支援を通じた項目リストの妥当性の検証と改善：ニーズ把握質問紙で実際に相談を希望した学生に対して支援を行うことを通して、質問紙の回答に見られた「困り感」と実際の生活上の困難の大きさとの関係、質問紙でとらえきれなかった「困り感」の有無を明らかにし、それにより質問紙の改善を行う。

3. 研究の方法

(1) ASD 困り感質問紙

<被験者>

大学生 594 名(男性 327 名、女性 262 名、不明 5 名)で、平均年齢は 19.2 歳(SD=1.1)であった。

<材料>

①AS 困り感尺度(本研究で作成)：大学生が自閉症スペクトラム障害的行動特徴により生じると考えられる困り感を抱いている程度を測定する。25 項目、6 件法。

②AS 特徴尺度(本研究で作成)：大学生の自閉症スペクトラム障害傾向を測定する。16 項

目、6 件法。

③自閉症スペクトラム指数(AQ)(若林ら, 2004)：成人の自閉症傾向を測定する質問紙。自閉症の症状を特徴づける 5 つの領域について各 10 項目ずつ、全 50 項目で構成されている。

④シャイネス尺度(WSS)(鈴木・山口・根建, 1997)：シャイネスを認知・感情・行動の側面から総合的に測定する質問紙。25 項目からなる。

(2) ADHD 困り感質問紙

<被験者>

大学生および大学院生 161 名(男性 68 名、女性 93 名)。平均年齢は 20.6 歳(SD=1.25)であった。

<材料>

①大学生の ADHD 特徴尺度・ADHD 困り感尺度：まず項目の選定を行い、ADHD 特徴尺度 10 項目、ADHD 困り感尺度 49 項目を選定した。ADHD 特徴尺度は、困り感を問うことができない項目で構成されており、「1 あてはまらない」から「4 あてはまる」の 4 件法で回答する。ADHD 困り感尺度は、困っている程度について「1 まったく困っていない」から「6 とても困っている」の 6 段階で評定する。

②大学生のための ADHD 傾向チェックリスト

(高橋・篠田, 2001)：大学生の ADHD 傾向を測定する尺度である。39 項目あり、各項目について「1 特に問題ではない」から「4 深刻な問題である・常に問題になる」の 4 件法で回答する。

③Integrated Visual and Auditory

Continuous Performance Test (IVA-CPT)

(Sandford & Turner, 1994-2000)：視覚刺激と聴覚刺激を用いて、注意や反応制御の機能を評価する課題である。

4. 研究成果

(1) ASD 困り感質問紙

ASD 困り感尺度・ASD 特徴尺度と AQ との相関は、「細部への注意」以外の AQ の下位領域と弱～中程度の相関を、AQ の合計得点と中程度の相関を示した。これから、AS 困り感尺度や AS 特徴尺度の得点が高い者ほど自閉症スペクトラム障害傾向が強いと言える。このことから、外的側面から収束的証拠が得られたと言える。さらに AS 困り感尺度・AS 特徴尺度と WSS との間には、AS 困り感尺度の合計と下位尺度において中程度の相関が、AS 特徴尺度において弱い相関がみられた。このことから、自閉症スペクトラム的行動により生じる困り感とシャイネス傾向には関連があり、分離して捉えることは難しいものだと考えられる。

(2) ADHD 困り感質問紙

大学生のための ADHD 傾向チェックリストとの相関は、表に示した通り中程度から強い相関があった。次に IVA-CPT との相関についてである。IVA-CPT と関連がみられたのは、集中力の持続困難尺度、衝動性尺度、整理整頓・優先順位決定能力不足尺度、不注意尺度であった。これらは ADHD の中核症状を表わしていると言える。他の尺度については、IVA-CPT で測定できる認知機能と相関がなかった。その理由として、プランニング能力や LD 傾向は、注意や反応制御の機能の問題から直接生じるものではないためと考えられる。また、対人関係の問題も認知機能とは直接関係はなく、認知機能の低さから来る二次的な問題であるためと考えられる。

以上のように、ADHD の中核症状を表わす尺度と IVA-CPT の相関があり、注意などの機能と直接結びつかないと考えられる尺度とは相関がないという傾向が認められたことから、ADHD 困り感尺度の妥当性についての証拠が得られたと言える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 岩渕未紗・高橋知音 (2011) 大学生の ADHD 困り感質問紙の作成 信州心理臨床紀要, 10, 13-24. 査読無
- ② 小田佳代子・高橋知音・山崎勇・森光晃子・金子稔・鷺塚伸介・上村恵津子・山口恒夫 (2011) 質問紙を用いた発達障害関連支援ニーズと精神的健康度との関連 CAMPUS HEALTH 48 (2), 210-215. 査読有
- ③ 小田佳代子・高橋知音・森光晃子・金子稔・鷺塚伸介・上村恵津子・山口恒夫 (2010) 質問紙を用いた自閉症スペクトラム障害関連支援ニーズの把握 CAMPUS HEALTH 47, 378-380. 査読無
- ④ 山本奈都実・高橋知音 (2009) 自閉症スペクトラム障害と同様の行動傾向を持つと考えられる大学生の支援ニーズ把握の質問紙の開発 信州心理臨床紀要, 8, 35-45. 査読無

[学会発表] (計 9 件)

- ① 岩渕未紗、小田佳代子、高橋知音、山崎勇、徳吉清香、金子稔、鷺塚伸介、上村恵津子、山口恒夫 2011 ADHD 困り感質問紙の尺度構成 第 49 回全国大学保健管理研究集会 山口大学 2011. 11. 9-10
- ② 高橋知音 2011 発達障害関連の困り感質問紙による支援ニーズの把握 (話題提供) 自主シンポジウム 大学で発達障害のある学生にどうやって“気づく”か?

日本 LD 学会第 20 回大会 跡見学園女子大学 2011. 9. 17-19

- ③ Takahashi T. & Iwabuchi M. ADHD Symptoms and support needs of Japanese university students. Asia Pacific Rim International Counselling Conference. Hong Kong. 2011. 7. 6-8
- ④ Takahashi T. & Iwabuchi M. Developing a needs assessment instrument for students with attention-related difficulties in higher education. 3rd International Congress on ADHD. Berlin, Germany. 2011. 3. 26-29
- ⑤ 岩渕未紗・高橋知音 (2010) 大学生の ADHD 困り感尺度の信頼性、妥当性の検討 日本 LD 学会第 19 回大会 愛知県立大学 2010. 10. 9-11.
- ⑥ 岩渕未紗・高橋知音 (2010) 大学生が抱く ADHD 傾向から来る困り感-ADHD 困り感尺度に関する面接調査をもとに- 日本心理臨床学会第 29 回大会 東北大学 2010. 9. 3-5
- ⑦ Takahashi, T. 2010 Developing Needs Assessment Instruments for a Proactive Approach to Supporting Students with ADHD and Autism Spectrum Disorder. 7th International Conference on Higher Education and Disability, Innsbruck Austria. 2010. 7. 21
- ⑧ 岩渕未紗・高橋知音 (2009) 大学生の ADHD 困り感尺度の開発 日本 LD 学会第 18 回大会 東京学芸大学 2009. 10. 10-12
- ⑨ 山本奈都実・高橋知音 (2009) 自閉症傾向のある大学生の支援ニーズ把握の質問紙の開発 日本教育心理学会第 51 回総会 2009. 9. 20-22

[図書] (計 2 件)

- ① 高橋知音・岩渕未紗・須田奈都実・小田佳代子・山崎勇・徳吉清香・森光晃子・金子稔・鷺塚伸介・上村恵津子・山口恒夫 2012 発達障害関連困り感質問紙実施マニュアル 三恵社 (非売品) 74 頁
- ② 高橋知音 (2012) 発達障害のある大学生のキャンパスライフサポートブック 学研 240 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口 恒夫 (YAMAGUCHI TSUNEO)
信州大学・教育学部・名誉教授
研究者番号：60115384

(2) 研究分担者

高橋 知音 (TAKAHASHI TOMONE)
信州大学・教育学部・教授
研究者番号：20291388

鷲塚 伸介(WASHIZUKA SHINSUKE)
信州大学・医学部・准教授
研究者番号：60313855

上村 惠津子(KAMIMURA ETSUKO)
信州大学・教育学部・教授
研究者番号：30334874

森光 晃子(MORIMITSU AKIKO)
信州大学・学生総合支援センター・助教
研究者番号：10468986

小田 佳代子(ODA KAYOKO)
信州大学・学生総合支援センター・助教
研究者番号：90549586

(3) 連携研究者